



『庶民生活と花も実もある豪州政治』

ビューティフル・シドニーから中年、単身赴任者の独り言です。

経済では、空前の資源ブームを背景に国家財政も赤字解消、順風満帆である。政治も連邦制ゆえに連邦政府と州政府が、ある意味独立し、それぞれが、与えられた分野(外交、国防、資源開発、教育、環境、社会福祉、インフラ整備等)で強い政権運営が行われている。経済と政治の両輪が安定した社会、それがオーストラリアの特徴となっている。

私の生活体験では、①築3年の高級マンションは、サッシからの雨水の滲みが1年以上も修理されず ②通勤電車の定時到着率は95%程度 ③市内中心部に向かう幹線鉄道でも48時間連続の工事休止(土日)は当たり前 ④ビジネス街のオフィスでは、電圧の不整流でPCが破損 ⑤自動更新の自動車任意保険の新契約書も1ヶ月遅れ ⑥2年前から始まった最寄り駅の改修工事は、未だ継続中 ⑦TV番組の開始時刻も日常的に前後あり などなど、日本の生活環境(リズム)に比べると、相当にルーズな国、オーストラリア。

また、政治家のスキャンダル(州教育相がクラブで・・・。同防衛相が執務室で・・・。州首相の息子が飲酒運転。汚職解任議員との癒着。)が、新聞、TVを賑わし、日本的常識からは、失脚かと思われる議員も、振り返りの機会が用意され、サプライズ人事となることもある。政治の世界もかなりファジーに感じる。一方で、政治家の出处進退は、意外なほどに、クールであり、州政府首相が家族愛から、また、長く務めたからと辞職までするが、最近、交代した州首相達は、皆50歳代半ばと政治家は総じて若い。政治キャリアを経て、民間会社に就職する場合も多いと聞く。

オーストラリア連邦議会では、1972年以降、2大政党(労働党と自由党・国民党連合)で4回の政権交替(首相は、6人目)があり、政治的な緊張感があるが、前ハワード首相までの5人の平均在任期間は、7年間と下院議員任期3年の2倍を超えている。2大政党制で且つ政権維持期間が比較的長いことが特徴となっている。このため、新首相は、かなり長期的な視野と責任を持って、政策立案し実行出来る素地が形成されている。

2007年11月の連邦議会議員選挙で、ハワード自由党・国民党連合政権に兆戦し、11年9ヶ月ぶりに政権を奪取した労働党ラッド党首(現首相)の颯爽とした登場とその後の行動力を見ると、日本の政治風土、頻繁な首相交代劇との違いに、驚きを禁じ得ない。

当地の政治家は、年齢も若く(ハワード前首相は、退任時67歳で国会議員年長第2位。現政権の閣僚も、最年少は30歳で、30歳、40歳代が多い)、非常にエネルギッシュに感じられる。

ラッド首相も就任時、議員歴 10 年の 51 歳であった。就任後は、公共放送である ABC と SBS の TV 局等への露出度も半端でなく、インタビューの辛らつな質問にも、口角泡を飛ばしながらも持論を展開、一步も引かないやり取りは、大いに感心させられる。

同首相は、母子家庭に育ち、16 歳で労働党に入党、高卒後の社会勉強を経て大学進学、そして複数の職(外務省、政党スタッフ、州首相府長官、会計事務所)を経験しながら鍛えられた思想・信条・持論・知識・経験等を政治の場で、対抗政党とのディベート力として、また政策立案能力として十分に発揮し、実行する姿勢は、羨ましい限りである。

日本のぶら下がりインタビューや討論番組が、時間的制限や出演者の多さから何を言いたいのか言っているのか判らない場合が多いのに比べ、非常に新鮮である。国会でのメモ棒読み答弁や短時間のコメントではなく、政治家の本心が透けて見える様な政治番組や報道が日本でも定着すれば、政治に光が見えるのではないか。

また、日本国民の政治への関心の異常なまでの低さ、期待感の裏返しは、目を覆うばかりであるが、オーストラリアの場合、選挙権の行使は、義務であり、投票に行かない場合、罰金が科せられる。この義務化は、過去の低投票率が原因と思われるが、投票率 30% 台も普通となった日本もこの様な荒治療が必要かも知れない。

日本の経済は、BRICS の台頭、特にアジア・太平洋圏での中国の存在感が拡大し(日本は、対オーストラリアの輸出入総額で 30 年以上、第 1 位を維持して来たが、2007 年度には中国に抜かれた。)、世界的にも存在感が低下する中で、一方の政治面の脆弱性が続くことは、国民にとって、非常に悲しいことであり、早急に両輪そろっての堅実な前進を強く期待するものである。

その過程では日本人の意識改革が大いに求められる。美德と言われた勤勉、堅実、正確性と言った特徴が、ややもすると、画一的な発想に行きがちである。日本は、多様性のある国と思いつつも、流され易い国民性を持っている様に思う、雪崩を打って一方に荷担する、勝者或いは多数意見を絶対とする風潮が強いのではないか。

冒頭に書いた様にかなりルーズではあるが、それらも飲み込むオーストラリア人のしたたかさ(フレキシビリティ)も取り入れ、一時はやった「鈍感力」、「多様性」を持って種々の状況に対応出来る国民になって欲しいものである。オーストラリアは、国家形成の経緯、移民政策等から、総人口の 24.1% が外国生まれ、英語以外を日常語とする人が 15.6% の多民族国家であるが、この事実が英語圏であることと共に国際的な立場で大きなアドバンテージに思える。

日本もオーストラリアと同じ島国(大きさに絶対的な違いがあるが)であり、人口集中のアジア諸国と近い地理的環境にあることから、諸外国との適切且つ適度な相互乗り入れを経済・社会・教育・政治の各層で進め、日本人の国際化を高める着実な取り組みが望まれる。

オーストラリアでの生活は、実感の「世界は一つ」である。

平成 20 年 9 月 30 日
在シドニー タロンガのヒロ